論　説

指鬘と鬘、華鬘*

荒見泰史・桂弘

１．はじめに

「指鬘」とは、書いて字のごとく「指」でできた「鬘」のことである。「鬘」というのは、サンスクリット語を音写するために作られた文字であり、花輪のようにつなぎ合わせた、宗教上の荘厳などに用いられる माला（mālā）という一種の形状を指す概念で、広く言えば花輪や瓔珞、数珠がこの類に入る。指でこの「鬘」を作るというのは想像するだけでも気味の悪い感じを与えるが、この「指鬘」とはまさにそこから想起されるような殺人鬼、仏伝故事の登場人物の一人、アングリマーラー（梵語 Anguli mālā）が身に着ける装身具、あるいはその人そのものにつけられた漢訳名である。

このアングリマーラーの物語は、殺人鬼から転じて仏道に励み、最後には阿羅漢果を得るという極めて意外な展開によって古くから人々の関心を引き付けてきた。さらに六朝宋・求那跋陀羅訳『央掘摩羅経』巻第四では、アングリマーラーは南方六十二恒河沙刹の一切宝荘厳国に住む一切世間楽見大精進如来がこの世に姿を現した仮の姿であるとし、また巻第二では、仏弟子の目連、舎利仏、阿難、羅睺羅、阿那律、陀娑、滿願子（富樓那）、孫陀羅難陀、優波離さらには文殊師利すら「修習蚊蚋行（修習、蚊蚋の行）」「陋哉蚊蚋慧（陋きかな蚊蚋の慧）」などと非難されるという、どこか『維摩経』に似た痛快なくだりがある。筆者もまたこうした物語の展開と流布に興味を持つ者の一人であるが、しかし、本稿ではこの指鬘の説話についてではなく、仏教漢訳の過程で生じた新たな文字、新たな概念とその展開という言語的関心から、この मालाの語を取り巻く鬘、魔羅、摩羅、魔、末利、茉莉などの語について考えてみたい。

２．アングリマーラーの訳語

仏教文献類に幅広く見られるアングリマーラーの訳語につき、まず『大正新脩大蔵経』などの記述をもとに簡単に整理しておきたい。なお、ここでは、サンスクリットからの翻訳とその定着という観点から、明清時代などの部分では一部割愛した部分がある。

央崛魔　『水陸道場法輪宝懺』巻第二（経題）

央崛魔羅　『十門弁惑論』巻上（経題）、『大周刊定衆経目録』巻第五、巻第十二（ともに経題）、『開元釈経録』巻第五、巻第十二、巻第十六、巻第十九、巻第二十（ともに経題）、『貞元新定釈経目録』巻第四、巻第七、巻第二二、巻第二六、巻第二九（経題）

央掘摩羅　『摩訶摩耶経』巻第一、『菩薩本生鬘論』巻第四、『金色童子因縁経』巻第五、『金光明経』巻第三、『摩訶止観』巻第二、『諸経要集』巻第十七、『大方広仏華厳経随疏演義鈔』巻第二十八、『維摩経略疏垂裕記』巻第八、『四分律行事鈔資持記』下一、『大唐内典録』巻第二（経題）

央掘魔羅　求那跋陀羅訳『央掘魔羅経』（全編通して）、『仏説仏那経』巻第一、『阿毘曇毘婆沙論』巻第六、巻第十九　巻第二四、巻第四三、『歴代三宝紀』巻第十（経題）、巻第十三（経題）、『高僧伝』巻第三（経題）、『経律異相』巻第八、『広弘明集』巻第二六（経題）、『一切経音義』巻第四四（経題）、七一、『出三蔵記集』巻第二、巻第四、巻第五（ともに経題）、法経『衆経目録』巻題一、巻第二、彦琮『衆経目録』巻第一、三、四、靜泰『衆経目録』巻第一、三、『大唐内典録』巻第四、巻第六、『古今訳経図紀』巻第三、『真言要決』P.2044、S.2695

央掘魔　『大唐内典録』巻第二（経題）

央瞿利摩　『雑阿含経』巻第三八

央瞿利摩羅　『雑阿含経』巻第三八、『仏所行讃』巻第四

安仇利　『翻梵語』巻第五

安仇利摩羅　『阿毘曇毘婆沙論』巻第三

指髻　『開元釈経録』巻第二、三、『貞元新定釈経目録』巻第三、巻第四、巻第二二（ともに経題）

指鬘　『仏説鴦掘摩羅経』、『央掘魔羅経』（指の鬘を指して）、『増一阿含経』巻第三一、『賢愚経』巻第十一、『出曜経』巻第十七、巻第十八、『仏説仏名経』巻第十五（経題として）、『文殊師利問経』巻上（経題）、『阿毘達磨大毘婆沙論』巻第十一、三十一、三五、四四、七六、八三、一一五、一三一、『阿毘達磨順正理論』巻第一、四三、七一、七六、『龍樹菩薩為禅陀迦王説法要偈』、『妙法蓮華経玄賛』巻十、『大般涅槃経集解』巻第四三、『梵網経古跡記』巻下（経題）、『金剛般若論会釈』巻中、『倶舎論疏』巻第一、『止観輔行伝弘決』巻第二、『歴代三宝紀』巻第六、巻第七（ともに経題）、『大唐西域記』巻第六、『釈迦方志』巻第一（注記として）、『法苑珠林』巻第二九（注記として）、巻第九三、『諸経要集』巻第十七、『一切経音義』巻第七一、『翻梵語』巻第五、『翻訳名義集』巻第一、巻第二、『出三蔵記集』巻第二（経題）、『衆経目録』巻第二、『大唐内典録』巻第二、巻第三（経題）、『古今訳経図記』巻第二（経題）、『大周刊定衆経目録』巻第五、巻第八、巻第十四（ともに経題）、『開元釈経録』巻第二、巻第三、巻第十五、巻第二十（ともに経題）、『開元釈経録略出』巻第三、『貞元新定釈経目録』巻第三、巻第五、巻第二五、巻第三十（ともに経題）

殃崛　『大慧普覚禅師普説』巻第十五

殃崛摩　『雑譬喩経』巻第一

殃崛摩羅　『大慧普覚禅師普説』巻第十、巻第十五、『大明高僧伝』巻第五

殃崛摩羅尊者　『大慧普覚禅師普説』巻第十

殃崛魔　『大通方広懺悔滅罪荘厳成仏経』巻下 S.1847

殃掘　『妙法蓮華経玄義』巻第二（経題）、『妙法蓮華経玄義』巻第十（経題等）、『首楞厳義疏注経』巻第四（経題）、『摩訶止観』巻第七（経題）、『止観輔行伝弘決』巻第七、巻第十（経題など）

殃掘摩　『成唯識論了義燈』巻第四、『止観輔行伝弘決』巻第七

殃掘摩羅　『仁王護国般若経疏』巻第五、『妙法蓮華経玄義』巻第二、巻第十（経題）、『維摩経略疏垂裕記』巻第六、『摩訶止観』巻第七（経題）、『止観輔行伝弘決』巻第七、『仏祖統紀』巻第一、巻第三（経題）

殃掘魔羅　『無明羅刹集』巻上、『経律異相』巻第三五、三九（経題）、『一切経音義』巻第七六

指鬘花　『翻梵語』巻第六

指鬘華　『翻梵語』巻第二

捐鬘華　『翻梵語』巻第五

鴦求利摩羅　『翻梵語』巻第五（鴦竭摩の注）

鴦崛　『維摩経略疏』巻第八（経題）、『法華経安楽行義』、『四教義』巻第十一（経題）、『宗鏡論』巻第二一、巻第七八、『一切経音義』巻第八十、『開元釈経録』巻第十二（経題）、『貞元新定釈経目録』巻第二二（経題）

鴦崛利摩羅　『翻梵語』巻第六（鴦崛魔の注）

鴦崛梵志　『翻梵語』巻第五

鴦崛摩　『法苑珠林』巻第四四、『一切経音義』巻第五四（経題）、『開元釈経録』巻第二、巻第十三、巻第二十（ともに経題）、『開元釈経録略出』巻第三（経題）、『貞元新定釈経目録』巻第三、二三、巻第三十（ともに経題）

鴦崛摩羅　『四諦論』巻第一、『法華義疏』巻第七（経題）、『大般涅槃経集解』巻第四三、『注大乗入楞伽経』巻第六、『法華経安楽行義』、『釈浄土群疑論』巻第五、『宗鏡論』巻第二四、巻第八十（経題）、巻第九二、『一切経音義』巻第二六、『大周刊定衆経目録』巻第五（経題）

鴦崛摩鬘　『翻訳名義集』二（経題）

鴦崛魔　曇無讖『大般涅槃経』巻第十九、慧厳『大般涅槃経』巻第十七、『四分律』巻第一、『十住毘婆沙論』巻第六、『鞞婆沙論』巻第十一、『翻梵語』巻第六、『開元釈経録』巻第二（経題）、『貞元新定釈経目録』巻第三（経題）

鴦崛魔羅　『大智度論』巻第八三、『大乗起信論義疏』下之上（経題）、『宗鏡論』巻第八（経題）、巻第十九、巻第三二（経題）、巻第三四（経題）、巻第五五（経題）、巻第七四、巻第七九、巻第百、『法苑珠林』巻第二三、、『開元釈経録』巻第二（経題）、『薬師経疏』S.2551、『大方広華厳十悪品経』S.132

鴦崛髻　法炬『仏説鴦崛髻経』、『仏説仏名経』巻第十五（経題）、法経『衆経目録』巻第三（経題）、彦琮『衆経目録』巻第二（経題）、静泰『衆経目録』巻第二（経題）、『大唐内典録』巻第七、八（ともに経題）、『一切経音義』巻第五四（経題）、『大周刊定衆経目録』巻第五、巻第八、巻第十四（ともに経題）、『開元釈経録』巻第十三、巻第二十（ともに経題）、『開元釈経録略出』巻第三（経題）、『貞元新定釈経目録』巻第四、巻題二三、巻第三十（ともに

経題）

鴦崛鬘　『僧伽羅刹所集経』巻下、『経律異相』巻第十七、『大周刊定衆経目録』巻第八（経題として）、『開元釈経録』巻第二十

鴦掘　『善見律毘婆沙』巻第七（経題）、『一百五十讃仏頌』、『妙法蓮華経玄義』巻第六（経題）、『大方広仏華厳経疏』巻第五（経題）、『大般涅槃経疏』巻第六（経題）、『維摩経玄疏』巻第五（経題）、『維摩経略疏』巻第二、五（ともに経題）、巻第六、巻第七、巻第八、巻第八（ともに経題）、『金光明経玄義拾遺記』巻第六、『金光明経文句記』巻第二（経題）、『大毘盧遮那成仏経疏』巻第十七（経題）、『臨済慧照玄公大宗師語録』、『宗鏡録』巻第十三、『一切経音義』巻第四五、『翻梵語』巻第一（経題）、『浄名経関中釈抄』巻下 P.2154

鴦掘多羅　『善見律毘婆沙』巻第一（経題）

鴦掘摩　竺法護『仏説鴦掘摩経』、『鞞婆沙論』巻第三、『仁王経疏』巻下、『一切経音義』巻第五四（経題）、『翻梵語』巻第二（鴦群利摩羅の注）、『出三蔵記集』巻第二（経題）

鴦掘摩羅　支謙『撰集百縁経』巻第三、『大荘厳論経』巻第七、巻第十五、『賢愚経』巻第四、曇無讖『大般涅槃経』巻三十一（宋、元、明、宮本は「崛」）、慧厳等『大般涅槃経』巻第二八、巻第二九、『仏説観仏三昧海経』巻第六、巻第八、『善見律毘婆沙』巻第七、『仁王護国般若波羅蜜多経疏』第一（経題）、『法華玄論』巻第五、『妙法蓮華経玄讃』巻第一（経題）、『大般涅槃経義記』巻第九、『観弥勒菩薩上兜率天経讃』（経題）、『説無垢称経賛』巻第二、『金光明経玄義』巻下、『金光明経玄義拾遺記』巻第六、『大毘盧遮那成仏経疏』巻第七（経題）、『瑜伽論記』巻第三、『瑜伽師地論略纂』巻第一、巻第四、『成唯識論掌中枢要』巻下、『大乗義章』巻第一（経題）、『能顕中辺慧日論』第三、『釈門自鏡録』巻下

鴦掘魔　『別訳阿含経』巻第一、『増一阿含経』巻第一、巻第三一、『仏本行経』巻第四、『大荘厳論経』巻第十五、『出曜経』巻第十八、『仏入涅槃密迹金剛力士哀恋経』、『仏説須真天子経』巻第二、『優婆塞戒経』巻第六、『分別功徳論』巻第二、『鞞婆沙論』巻第七、『三弥勒経疏』（経題）、『歴代三宝紀』巻第六（経題）、『高僧法顕伝』、『法苑珠林』巻第八八、巻第九三（経題）、『出三蔵記集』巻第二、巻第四（ともに経題）、『大唐内典録』巻第二（経題）、『古

今訳経図紀』巻第二（経題）、『大周刊定衆経目録』巻第五（経題）

鴦掘魔羅　『別訳阿含経』巻第一、曇無讖『大般涅槃経』巻第二六、三十、慧厳等『大般涅槃経』巻第二四、『仏説仏名経』巻第三十、『善見律毘婆沙』巻第四、『優婆塞戒経』巻第六、『随相論』、『成実論』巻第八、『妙法蓮華経玄讃』巻第三、『維摩経略疏』巻第七、『大乗義章』巻第二十（経題）、『歴代三宝紀』巻第六（経題）、巻第十一（経題）、『出三蔵記集』巻第二（経題）、彦琮『衆経目録』巻第三、『大唐内典録』巻第二、巻第四（経題）、『大周刊定衆経目録』巻第一、巻第五（ともに経題）、『浄名経関中釈抄』巻下 P.2154

鴦掘魔羅且訶　『維摩経略疏』巻第一、

鴦掘髻　『出三蔵記集』巻第四（経題）

鴦掘鬘　『歴代三宝紀』巻第六（経題）

鴦竭摩　『翻梵語』巻第五（阿含経典の注と見られるが、今日の阿含経典各版本には管見の及ぶ限り見られない）

鴦群利摩羅　『翻梵語』巻第二

鴦瞿離魔羅　『弥勒菩薩所問経論』巻第八

鴦瞿利摩羅　『雑阿含経』巻第三八、『仏所行讃』巻第四

鴦寠利摩羅　『大唐西域記』巻第六、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻第三、『釈迦方志』巻第一、『法苑珠林』巻第二九

鴦寠利魔羅　『翻訳名義集』巻第一

鬘花外道　『一切経音義』巻第二六、

これらを総じて、まずこれほど多くのバリエーションが用いられているという点に驚く。この名称が経典名となったことと、多く説話が引用されたという理由もあろうが、同一の仏弟子に対してここまで膨大な種類の漢訳語が登場するのはほかに例がないのではないか。

これらをおおむね翻訳方法から分類すると、「指鬘」、「指髻」などの意訳語と、「央掘魔羅」、「鴦崛魔羅」、「鴦寠利摩羅」などの音訳語に分けられるのはほかの訳語と同じである。なお「鴦崛摩鬘」、「鴦掘鬘」、「鴦掘髻」のように音訳語と意訳語を混ぜたものも若干ではあるが見られている[1]。

このうちの音訳語を漢語音から見た場合、一文字目に多く用いられる。「殃」、

「央」、「鴦」は、古来同音と見てよい文字である。六朝以前の音韻を残すと考えられる『広韻』において、いずれも下平「陽」韻に属し「於良切」音で一致する。また二文字目以降でも「掘」、「崛」は入声「物」韻に属す「衢物切」音で、「摩」、「魔」も下平「戈」韻に属す「摩」音で一致する。つまり、この 3 文字を組み合わせた「殃掘摩」、「央崛魔」、「鴦掘魔」などの 12 パタンの名称は全て音の上では同一ということができる。とはいえ、なぜこれらが一貫して同じ字が使われなかったのだろうか。

この点について、それぞれの字義が手掛かりになろうと筆者は考える。というのは漢語においては古音が同音の場合、字義が近い場合が多いが、しかし名前を印象付ける第一文字目は褒義と貶義の大きな差を兼ね備えのある興味深い字音なのである。というのも「殃」、「鴦」、「央」の属す『広韻』下平「陽」韻の「於良切」は、他に「霙」、「泱」、「鉞」などがあり、その字義は主に褒義で、広々とした、或いは広く澄んだ音や容貌を表すのに用いられるが、しかし「殃」のように貶義で「禍」の意味で使われるものもあるのである。これは単純に見れば「央」字が首械をする「人」の形象から発展したものであるため、元の意味から罪、禍につながるものを残した意味と、次第に械の中心にある人と、中心からの広がりを表す意味を表すようになった意味とに転じたものと推測されるが、結果的に褒義と貶義の双方の意味を持つようになっているのである。こうした意味を活かし、アングリマーラーの褒貶の両面を表すうえで「於良切」音が選ばれたのではないか。このように見た場合、最も古い訳である『雑譬喩経』などでは「殃」字によって殺人鬼アングリマーラーを音訳されているが、仏弟子として活躍し、羅漢へと転じていく描写が強調される場合や、一切世間楽見大精進如来の化身とされる場合のように、アングリマーラーの両面性を表す場合に「殃」＝「禍」を冠しているのはいささか行き過ぎの感もあろう。かくて「殃」字はしだいに使用されなくなったのかもしれない、との推測が成り立つ。

そのように見た場合、後にも言うように、花輪の意味を持つ mālā を「鬘」と作字し意訳してその意味を理解しながらも、音訳の「摩」＝「魔」あるいは「摩羅」＝「魔羅」と併用している点にもこれと一致する両面性が表されているように思えてくるのである。この点については後述する。

さて、以下に上の用例について若干具体的に考察してみたい。

まず、現存文献中、最も古い訳出は後漢・支婁迦讖『雑譬喩経』に見られる人肉を好む国王の本縁譚で仏弟子「殃崛摩」がその生まれ変わりである、というくだりであろう。続く呉・支謙の『撰集百縁経』「船師渡仏僧過水縁」に例え話として「如鴦掘摩羅，瞋恚熾盛，殺害人民，我亦度彼出生死海。（鴦掘摩羅の如く、瞋恚熾盛にして人民を殺害するも、我も亦た彼を度して死海を出し生れしむ。）」のように「鴦掘摩羅」の名が見えている。「殃崛」と「鴦掘」は違う文字でありながら全く同じ音であることは先にも言う通りである。ただ文字の使い方の差を「人肉を喰う罪」を強調する場合と、「仏に教えを受け死海を抜けだした」ことを言う場合との差と見ると、整合性があるのではないか。

アングリマーラーの物語全体については、現存文献では西晋・竺法護『仏説鴦掘摩経』（高麗蔵本は「掘」、宋・元・明本は「崛」）が早く、東晋・瞿曇僧伽提婆訳『増一阿含経』（「指鬘」或いは「鴦掘魔」と訳す）、劉宋・求那跋陀羅『央掘魔羅経』が続く。故事が広く知れ渡り後果の方が強調されるようになるのだが、たしかに「殃」字を使用する用例は、他に比べて圧倒的に少なくなり、引用書目や類書で用いられる程度となっている。後代の敦煌本でも使用例が見られるが、S.1847『大通方広懺悔滅罪荘厳成仏経』巻下のような懺悔滅罪を説く経典において「殃崛魔」のような名称が使用されているのは「禍」を強調するためであろう。

経録での記載としては、梁・僧祐『出三蔵記集』録上巻第二「新集経論録第一」に竺法護『鴦掘摩経』と求那跋陀羅『央掘魔羅経』の経名を今日に伝わる名称で録していながら、続く「新集異出経録第二」に「鴦掘魔経」に注記して「竺法護出『鴦掘魔経』一巻、求那跋陀羅出『鴦掘魔羅経』四巻」としている。ここに僧祐による「鴦」、「央」の若干の混用が見られる。これに続く多くの経録ではさらに文字上の混乱が見られ、竺法護訳『鴦掘摩経』に関しては、同名で表記される経録は後の時代には見られていない。かくて、梁・僧祐『出三蔵記集』の 6 世紀頃には既に多くのバリエーションを以て称され、広くこの物語が語られていたことを推測させるのであるが、そうした語りに使用されていたテキストとして、「新集続撰失訳雑経録」第一では、『央

掘魔羅帰化経一巻抄(抄)』、『仏降央掘魔人民歓喜経一巻(抄)』、『央掘魔悔過法経一巻(抄)』、『帝釈施央掘魔法服経一巻(抄)』、『鴦掘髻経一巻』、『鴦掘魔母因縁経一巻(抄)』があったことが記録され、ここでも多くのバリエーションと文字の混用が見られるようになるのである[2]。また『出三蔵記集』では、「摩羅」は「魔羅」、「魔」とも混用され、或いは「鴦掘魔」のように「魔」に通ずるもとも理解されていることがわかる。この「魔」、「魔羅」については後述する。また「新集経論録第一」では「鴦掘摩経一巻」に注して「或云『指鬘経』或云『指髻経』」といい、この時代には意訳の経典名も見られていたことがわかるのと同時に、「鬘」に変えて「髻」字も用いられていたことがわかる。

興味深いことは、こうした状況に対して、インドから帰国した玄奘三蔵によって語の統一が図られた形跡が見られることである。玄奘三蔵は『大唐西域記』巻第六に鴦窶利摩羅と名前を改め、注に「旧曰央崛摩羅，訛也。」としている（同書を抄出したとみられる『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻第三も同様である）。ほぼ同時代の道宣、道世が『釈迦方志』、『法苑珠林』においてこの名称を使用したのはこれを受けたものであることは明らかであろう。しかしそれ以前の時代にすでに旧名として定着しているこの名称は、経録に経題として用いられる場合や、『諸経要集』、『大方広仏華厳経随疏演義鈔』、『維摩経略疏垂裕記』、『四分律行事鈔資持記』などに見られるように『央掘摩羅経』や、『賢愚経』などの旧文献を引用した場合、『翻訳名義集』、『一切経音義』などで旧文献に注記される場合などには、旧名称を用いざるを得ず、玄奘三蔵の弟子にあたる基の『瑜伽師地論略纂』などでも「鴦掘摩羅」としている。逆に玄奘三蔵の提唱する名称は『翻訳名義集』巻第一に「鴦窶利魔羅」の名称で用いられる程度である。結果、唐代後期文献と見られる S.2551『薬師経疏』、S.132『大方広華厳十悪品経』でも鴦崛魔羅と旧に復しており、玄奘三蔵による新名称も定着することがなかったことがわかる。細かな問題であるが、「鴦掘摩羅」としている曇無讖『大般涅槃経』巻三十一では、宋、元、明、宮本が「崛」としているが、曇無讖訳をもとに加筆したと見られる慧厳等の『大般涅槃経』巻第二八、巻第二九ではともに「鴦掘摩羅」と「掘」を使用しており、あるいは「掘」字が元だったのではないかとの推測も成り立つ。ただ、言うまでもなく「崛」字の使用は早期の『雑譬喩経』に見られるもの

で、この問題はあくまでも『大般涅槃経』上の問題である。

また「殃掘」、「央掘」、「鴦掘」などの２字の表記も目立つが、音訳語としては意味をなさず、明らかに省略形である。ただ、こうした省略形は主として経題や韻文中での用例となっている。

最後に、『翻梵語』巻第五に見られる「捐鬘華」であるが、これは全く意味が通らない。あるいは『翻梵語』巻第二に言う「指鬘華」の「指」字が字形の類似によって書き間違えられたものではないか。

３．「鬘」と「末利花、茉莉花」

माला（mālā）といえば、一般に花輪の意味での用例が多いようであるが、本来は、行列、筋、グループ、集まりといった状態を抽象的に表す語のようである。そのような概念から花輪として荘厳する場所についても制限はなく、インドにおいてそれらが髪飾り、首飾り、腰巻などに使用されていたことはインドで出土するレリーフなどからも見て取ることができる。漢字、漢語にはそれ以前にこれに類する概念を表す語は見当たらず、「鬘」字の作字につながったのであろう[3]。

「鬘」の字は、現存の仏教文献中では呉支謙『須摩提女経』、『仏説給孤長者女得度因縁経』などに見られ、三国呉の時代には既に作字され使用されていたと見られる。

> 波旬答言：「善哉！菩薩！汝有深智，能問是義。諦聴！諦聴！当為汝說。時魔波旬，以己神力，即時化作諸天色像，以天瓔珞、宝鬘、華香荘厳其身；無量伎楽，以為娯楽，諸天婇女侍使左右……
>
> 波旬答えて言く、善きかな、菩薩よ。汝、深智有り、能くこの義を問ふ。諦らかに聴け、諦らかに聴け。当に汝の為に說るべし。時に魔の波旬、己の神力を以て、即時に化して諸天の色像を作し、天瓔珞、宝鬘、華香を以てその身を荘厳す。無量の伎楽は、以て諸天、婇女、侍使左右に娯楽と為す。……
>
> 呉・支謙『菩薩本縁経』、『大正新脩大蔵経』第３巻、62 頁 b。

「天瓔珞、宝鬘、華香を以てその身を荘厳し」とあるように装身具として用いられるものであることがわかる。ここでは「瓔珞」と「鬘」は別の概念としているが、rūcaka の訳語としてその双方が当てられることもあり、時に類似する概念として用いられたことがわかる。

この「鬘」（mālā）については『一切経音義』には以下のように解説する。

> 華鬘　梵言摩羅，云鬘。音蠻。案：西域結鬘師，多用蘇摩那花，行列結之，以為條貫。無問男女、貴賤，皆此荘厳。諸経中天鬘、宝鬘、花鬘帀等，皆是也。律文作鬢，非体也
>
> 華鬘　梵に言ふ摩羅とは、鬘を云ふなり。音は蠻。案ずるに、西域の結鬘師、多く蘇摩那花を用ひ行列にこれを結びて以て條貫と為す。男女、貴賤を問ふこと無く皆なこの荘厳たり。諸経中の天鬘、宝鬘、花鬘帀等は皆なこれなり。律文に鬢に作るは体にあらざるなり。
>
> 『一切経音義』巻第五九、『大正新脩大蔵経』第 54 巻、699 頁 c。

「蘇摩那花（ジャスミン）」を手に取りこれを並べて結んで「條貫」とする、つまり多くの花を並べて連ねたもので、男女、貴賤を問わずみなこの装いであったという。結鬘師がその装いを手伝っていたというが、それが頭髪上であったと中国で理解されたであろう事は、「鬘」字が「髟」を部首としていることからも疑いがない。この文字のゆえに、東アジア圏では髪飾りとしてひろまりをみせ、和語では「かずら」、「かつら」にこの文字が当てられている。また本来のインドでの用法に立ち返るに、ガンダーラのレリーフ類から見てもアングリマーラーの指鬘が冠のように頭につけていたことは共通している。

このことは『一切経音義』にも以下のように言っている。

> 指鬘　莫班反。即央掘魔羅也央掘。此云指鬘，或云結断人指結相箸為鬘安頭上，故有此名也。
>
> 指鬘　莫班の反。即ち央掘魔羅、また央掘なり。これ指鬘と云ふは、或ひは。人指を断つを結ひ、相い箸けて結ひて鬘と為し頭上に安ず、故

にこの名有ると云ふなり。

『一切経音義』巻第七一、『大正新脩大蔵経』第 54 巻、768 頁 a。

アングリマーラーは、頭の上に指鬘を頂いていたことがここには記されているのである。

しかし、mālā を如何に身に着けたかについては以下のような例もある。

……時宮女中，有一婇女，自手將一末利華鬘，前出繫於太子頸下。而太子眼熟視不瞬，観彼女人，即還自解末利華鬘，解已手持従窓牖中擲棄於外。

……時に宮女の中に一の婇女、自らの手に一の末利華鬘を將ちて、前に出でて太子の頸下に繫ぐ有り。しかるに太子、眼は熟視すること瞬ならず、彼の女人を観、即ち還た自ら末利華鬘を解きて、解きて已に手に持ちて窓牖の中従り外に擲棄す。

『仏本生集経』巻第十六、『大正新脩大蔵経』第 3 巻、726 頁 c。

ここでは、「太子の頸下に繫ぐ」とあるので、首飾りのように理解されていたことがわかるのである。おそらく mālā という語が、行列、筋、グループ、集まりといった状態を抽象的に表す語であることから、花輪くらいの意味であって、それを掛ける場所も頭上に制限されないのではないか。

また、この鬘に使用される花として、先には「蘇摩那花」とあり[4]、『仏本生集経』で「末利花」としている。現代語ではしばしばどちらもジャスミンと翻訳される語であり、薫り高い花を装飾に用いることが好まれたことがわかる。ただこの二種の花はたびたび同一視されたが、異なる植物として理解されている例もある。

以下は唐・不空『金剛恐怖集会方広軌儀観自在菩薩三世最勝心明王経』の一節である。

又欲問三世事。取童男或童女。依法澡浴。塗一小壇。遍彼身以白檀龍脳香塗之。以末利花為鬘。繫於頭上。誦真言百八遍。即去地一肘說所問

事。[注：]広州有此花香白而甘白色香甘[華]或銀銭蘇末那等代之亦得。
又た三世の事を問はんと欲せば、童男或ひは童女を取りて、法に依りて澡浴せしめ、一の小壇を塗らしむ。遍く彼の身、白檀、龍脳の香を以てこれに塗り、末利花を以て鬘と為し、頭上に繫ぐ。かくて真言百八遍を誦し、即ち地一肘を去りて問ふ所の事を説へ。[注：]広州、この花の香白にして甘白色なる有り。香、白の華、或ひは銀銭、蘇末那等にてこれに代ふるも亦た得たり。

『金剛恐怖集会方広軌儀観自在菩薩三世最勝心明王経』、
『大正新脩大蔵経』第 20 巻、11 頁 a。

しかし、いずれにしても、「末利」とされる場合、植物名として用いられるもの以外では、「鬘」との関わりで説明されることが多いのである。

末利花　鬘花堪作鬘。
末利花　鬘花。鬘を作すに堪ふ。
『一切経音義』巻第二七、『大正新脩大蔵経』第 54 巻、491 頁 c。

言語のから言えば、もともとは「末利花」というのは植物学上で用いられる名称ではなく、mālā という形状に用いられるために用いられたのではないかと推測される。「末利花汁」、「蘇摩那花」或いは「蘇末那花」は、儀礼などでしばしば供養に用いられ、また「蘇摩那花油」に精製されることは様々な経典に見られるとおりで、ほぼ共通の用途で古くから用いられていたことは間違いがないようである[5]。

「末利花」は唐代頃には「茉莉花」の名称で見られるようになるが、宗教儀礼において散華されるなど供養に用いられることは唐代以降にも続く。
晩唐の文人李群玉にも以下のような詩がある。

初地無階級、　初地[6]に階級無く、
餘基数尺低。　餘基[7]、数尺低し。
天香開茉莉、　天香たる茉莉を開き、

梵樹落菩提。　梵樹に、菩提に落つ。
驚[8]俗生真性、　俗を驚かせて、真性を生ましめんと、
青蓮出淤泥。　青蓮、淤泥より出ず。
何人得心法、　何人、心法を得んや、
衣鉢在曹溪。　衣鉢、曹溪に在り。

『李群玉詩集』「法性寺六祖戒壇」、
『全唐詩』、上海古籍出版社、1453 頁上。

広州の法性寺に遊んだ李群玉が六祖慧能の戒壇を偲んだ詩である。恐らくは法性寺に自生する茉莉の薫りを天香と称し、菩提へといざなう香りと表現したものであろう。

今日においても、中国、台湾の寺院などで茉莉花を繋いだ花輪が供養に用いられていることもこれを伝承するものであろう。そのような本来のイメージのゆえに、「指鬘」、「鴦掘魔羅」のように言う時、その両面性をより引き立たせるのではないか。

４.「鬘」と「摩羅、魔羅」

上にも言うように、アングリマーラーという名称の後半部分にあたる माला（mālā）は、意訳語にあたる「鬘」が作字され使用されたのは理解しうるが、多くの音訳語の場合、「末利」あるいは「茉莉」とでも訳されるのが本来であろう。そこに「摩」、「魔」あるいは「摩羅」、「魔羅」と訳されているのには如何なる意図が込められているのだろうか。

「摩羅」といえば、魯迅「摩羅詩力説」等でも知られるように、魔、悪魔の意味で使用される語である。より明確に「魔羅」とされる場合もあり、魔王波旬を「魔羅波旬」とする例も見られている。一般に、मारा（māra, 魔）の訳語として使用されたと解釈される語である。

「摩羅」を漢字の字義から考えてみると、「摩」字は「こする」、「さする」、「磨く」など、「羅」字は「網」、「絹」、「並べる」などが本来的な意味である。ただ、これらの字はともに仏教語の音訳に早期から多く用いられ、「摩」字で固有名詞や「摩訶」、「摩醯」などのほか「摩尼」など代表的な仏教語の訳に

も用いられる。「羅」字も同様で、羅睺羅などにはじまり、音訳語の固有名詞にとくに多く用いられる。かくて、早期の訳語において「摩羅」は「尼摩羅天」、「尊者維摩羅」、「尊者鳩摩羅迦葉」、「毘舎離耆婆拘摩羅薬師菴羅園」のように、「摩」、「羅」ともに仏教語の音訳語に多用される文字となっていたなかで「摩羅」と表記される個所も多く、必ずしも「摩羅」＝悪魔とはなっていなかったことがわかる。他に「失収摩羅 śiśumārā」のような海洋生物を指す場合もある。またさきに引く『一切経音義』巻第五九でも、「摩羅」を「鬘」の音を説明するのに用いている通りである。

ただ、そうしたなかでも「摩羅」を悪魔の意味で使用する用例があったのも、アングリマーラーを「魔」と訳したのも事実である。求那跋陀もアングリマーラーを訳して「央掘魔羅」と「魔」字で表しているのはそれを表している。

ちなみに、この「魔」字が登場するのは、後漢・安世高の頃と見られる。『長阿含十報法経』、『仏説転法輪経』にはすでに見られている。さらに呉・支謙『弊魔試目連経』になると魔王波旬も「魔波旬」として多く見られ、また「弊魔」という言葉で悪魔を意味して使用されるようになるのである。「魔羅」の語の使用も早く、後漢・支婁迦讖訳とされる『道行般若経』には既に見えている。かくて、のちにアングリマーラーの名称の「摩羅」と記載されていた部分を「魔」字に変えて「魔羅」とし、魔のイメージを冠して使用するようになっていくのである。

では、アングリマーラーの訳語として使用される「摩羅」に、いつから魔の意味が加えられたと言えるのであろうか。

求那跋陀訳では「魔羅」と明瞭に「魔」字を加えてそのイメージで使用されていることを表しているが、それ以前にそのようなイメージがあったかどうかについて、参考になるのが竺法護『鴦掘摩経』である。同経では、アングリマーラーの名称を「鴦掘摩」と「指鬘」の二種に使い分けていて、例えば以下のようである。

> 王白仏言：「唯然，世尊！有大逆賊名鴦掘摩，兇暴懐害断四徼道，手執厳刃傷殺人民，今故匡勒四部之衆，欲出討捕。」是時，指鬘在於会中，

去仏不遠，仏告王曰：「指鬘在此，已除鬚髮今為比丘，本与云何？」

王、仏に白して言く、「唯なり、世尊よ！大逆賊の鴦掘摩と名づくる兇暴にして害を懐き、四徼道を断ちて、手に厳刃を執りて人民を傷殺せる有り。今、匡さんが故に四部の衆を勒め、出でて討ち捕へんと欲す」と。この時、指鬘、会中の、仏を去ること遠からずに在り。仏、王に告げて曰く、「指鬘ここに在り。已に鬚髮を除き、今、比丘と為り。本と与すること云何」と。

『伝説鴦掘摩経』巻第一

『大正新脩大蔵経』第2巻、509頁b。

ここでは、凶暴な殺人鬼としての「鴦掘摩」と仏弟子としての「指鬘」を使い分けているわけである。全編を通して「鴦掘摩」はそのようなイメージで使用され、あたかも「摩」字を「魔」字と同じ概念でとらえているかのようである。この「摩」と「魔」に関しては、例えば前秦・僧伽跋澄訳『鞞婆沙論』では、巻第三で「鴦掘摩」巻第七で「鴦掘魔」と同一文献でも混用し、唐・基『妙法蓮華経玄賛』巻第一と十では「鴦掘摩羅」、巻第三では「鴦掘魔羅」と混用しているように、多くの文献で混用している。以上のことを総合してみるに、竺法護『鴦掘摩経』の「摩」も「魔」と同義で用いられている可能性は十分ると言えるのではないか。

５．まとめ

本稿では、筆者の参画する研究グループが行っているアングリマーラー説話の研究の中で気づいた訳語の問題につき若干考察を加えてきた。

結論としては、アングリマーラーという名称の漢語訳は実に様々なバリエーションを有するが、それはアングリマーラーの殺人鬼と羅漢(或いは如来)という両極端の二面性を表す必要から、同音ながら褒貶二種を持つ文字を当て組み合わせたことにより生じたものと推定しうることを論じた。竺法護訳にはすでにアングリマーラーの名称は、「魔」、「鬘」という二種の褒貶の異なる新字を当てて両面性を表そうとしていることは興味深いことである。ここでは明確に殺人鬼としての「摩（＝魔)」と、求道者としての「鬘」を使い分

けているのである。名称のイメージを作用する第一字目の「殃」、「鴦」、「央」では、「殃」が常に「禍」の意味を強く持つために好まれなくなっていったのではないかとの推測も上に述べたとおりである。こうした褒貶を表すことばは、仏教説話の伝承と発展の中で時にいずれかのイメージを強調するために自在に書き換えられていたことも一定割合の文献の中で見出すことができるのである。

まさに、仏教徒が外来のことばを漢字に訳す時、こうした漢字と字音の持つ複雑さを意識して新たな概念をうつすことの難しさをここに垣間見ることができよう。筆者はかつて「仏（佛）」字を作りだした仏教徒の工夫などについて論じたことがあるが、アングリマーラーの訳語に関して、漢字と漢字音のもつ褒貶を状況に応じて訳語に反映させようという工夫が見られることは、仏教語漢訳を考える上において併せ考えるべき極めて重要な意味を持つのではないだろうか。

---

* 本研究は、広島大学敦煌学プロジェクト研究センターのグループで行っている調査研究の一環である。多くは白須淨眞研究センター顧問からの指摘によるもので、アングリマーラー説話については、楊柳班員により研究成果が公表される予定である。本稿は、その本題から外れた部分において筆者の研究的興味から気づいた点につきまとめておく。アングリマーラー説話については以降の研究成果を参照されたい。

1 ほかに、『望月仏教学大辞典』では“央仇魔羅”などを紹介しているが、『大正新脩大蔵経』からは今のところ見つかっていない。

2 『衆経目録』では、同経より抄出されたものとして『帝釋施央掘魔羅經』、『佛降央掘魔羅人民歡喜經』、『無量樂國土經』、『央掘魔羅歸化經抄』、『央掘魔羅懺悔經』、『佛説央掘魔羅母因縁經』などが紹介されている。

3 『アプテ梵英辞典』（*Sanskrit-English Dictionary*, Vaman shivram Apte）などによれば以下のようにある。 ①a garland, wreath, chaplet; ②a row, line, series, ……; ③a group, cluster, collection; ④a string, necklace; ⑤ a rosary, chain, a streak, a series of epithets; the offering of several things to obtain a wish……

4 蘇摩那花はジャスミン。サンスクリットは mallikā とされ、茉莉花もまたこのサンスクリットの当て字と推測される。

[5] 「蘇摩那花油」については、『陀羅尼集経』巻第四（『大正新脩大蔵経』第18巻、824c）に見られる。また「末利花汁」については『文殊師利問経』巻下（『大正新脩大蔵経』第14巻、508c）に見られる。
[6] 初地は、菩薩五十二位のなかの十地の第一。
[7] 餘基は、旧跡、残基。
[8] 驚、『全唐詩』には注して「一に警と作る」とする。